

平成31年6月3日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880035

氏 名 場原由佳

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 アトランタ (国名 アメリカ)
2. 研究課題名（和文）：アメリカの陸上競技女子選手の体格と競技パフォーマンスとの関係
3. 派遣期間：平成31年2月2日 ～ 平成31年5月7日 (93日間)
4. 受入機関名・部局名：Emory Sports Medicine and Spine
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

今回は陸上競技女子選手(跳躍と短距離)を対象にアンケートと体組成を2回測定し(In-door season 後と out-door season 後)、パフォーマンスとの関連・変化をみるという内容の研究であった。同様の研究は日本の女子選手を対象にすでに行っており、その結果との比較のため、本来は採血などを含めた項目の測定を行いたかったものの、侵襲の少ないアンケートと体組成の測定のみを行うこととした。Host Researcher がアメリカ陸上競技連盟のチームドクターであり、ジョージア州での Division1 のジョージア工科大学を始めとする多くの大学陸上部のチームドクターであることから被験者集めは割とスムーズに行うことができた。最終的には28名の選手をリクルートすることができ、中には日本記録以上に値する記録を持っている選手もいた。倫理委員会への申請は2ヶ月ほどはかかったものの、研究開始数週間前には通ることができた。研究は予定どおり、渡米した直後の2月と帰国直前の5月に測定を行った。実際には、測定を忘れる選手が多々いた為、何度も足を運ばざるを得ない状況ではあったが、最終的に1名を除き、全員2回測定することができた。さらに Out-door Season 時期であった為、試合会場でも数名測定を行った。データ収集は終了したため、現在は解析とアンケート内容の入力作業を行っている。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

今回アメリカ滞在中に、本研究と同様の研究で日本人選手を対象にしたデータを発表する機会を2回、招待講演という形でいただき、その中で本研究を行っていることを触れた。一つはアトランタ市内の医療関係者向けの Emory Sports Medicine Symposium であり、二つ目は全米のスポーツドクターを対象にした最も大きな学会である American Medical Society of Sports Medicine (AMSSM) の中のセッションであり、招待講演であったため多くの人に聞いていただいた。アメリカでは女性アスリートの DXA (二重エネルギー X 線吸収測定法) を使用した体組成の研究に関心をもつスポーツドクターが多くいるため、ディスカッションする機会も得ることができ、大変有意義な機会であった。今後は本研究のデータを American College of Sports Medicine や AMSSM、および国内学会で発表する予定である。現段階では 2020 年の 6 月に北海道で行われる日本整形外科学会スポーツ医学部、もしくは 10 月に行われる日本臨床スポーツ医学会での発表を考えている。また少しでも早く今回のデータを英語論文化したいと考えている。

さらに、今後、研究経費を獲得できた際は、今回のように 2 回のみではなく、さらに縦断的な測定回数を増やして年間 4 回ほどは測定を行いたいと考えている。本研究を行う前に日本のトップレベルの選手を対象とした研究を 2016-2017 年度にかけて行っているため、今回の結果と検討比較することによって陸上王国アメリカの選手と日本の選手との相違点を見出すことができれば、2020 年の東京五輪およびその後の日本の女子陸上競技選手の競技力向上に向けても重要なデータになると予想される。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究により多くのアメリカ人女子選手と接することができ、日本の選手との相違点を目の当たりにした。アスリートは全員協力的であり、同時に非常に自分の意見を持っている選手が多く、指導者や私にもしっかりと自分の意見を述べる選手が多かったのは新鮮に感じた。また、詳細は割愛するが、アンケート結果からも、日本の選手とは異なり、食生活などを過度に気にしたりする選手が少なく、日本記録以上の記録を持ったトップアスリートであっても学業優先であるのも印象的であった。

この度は研究が主であったものの、私が帰国子女でありアメリカ医師国家試験である USMLE Step2 に合格している整形外科医でもあることから、研究の合間に外来や手術、さらにシーズン前のメディカルチェックやゲームドクター帯同を見学させていただく非常に貴重な機会をいただいた。また AMSSM にも招待いただき、参加したことで以下の点は新鮮に感じた。まずアメリカの場合は学会の評議員も半分が女性であり、研修終了後 10 年未満の若手医師も多くおり、老若男女問わず、多くの意見が反映されていること。また男女問わず自分の子供をスポーツ現場に同伴しながら仕事をしているスポーツドクターが多く見られたことは、非常に新鮮であり、どのような環境であっても仕事・研究に対してやりくりをしていく姿勢に刺激を受けた。また色々なスポーツドクターの家族と接したが、パートナーと協力して子育て・家事を行っており、お互いを尊重しあい、家族との時間を大事にしている、ロールモデルになる先生方と出会えたのは非常に貴重な経験であった。そのような背景もあることから、今回私は 2 歳半になる息子と生後 6 週間になる娘を連れての単身渡米となったが、子供がいても周りの温かい目と協力により研究に支障なく過ごすことができた。普段アトランタでは、子供達は平日の日中は保育園に通っていたが、日本にいる時より私とも長く過ごすことができ、また土日は他のファミリーと時間を過ごす毎日であり、毎日とても楽しい時間であった。